

氏 名	かな さわ 金 澤	さとし 哲
-----	--------------	----------

(論文内容の要旨)

本論文は、ウィリアム・フォークナー後期の大作『寓話』の創作過程と批評史、さらに題材や文体などの特徴を詳細に論じることによって、長らく失敗作の烙印を押されてきたこの作品の再評価を図ったものである。

具体的には、まず第一部において『寓話』の創作過程を詳細に検討し、この作品がフォークナーにとって特別な意味を有するものだったことを示す。第二部では、『寓話』の批評史を検討し、従来の『寓話』批評の類型性を指摘するとともに、その問題点を明らかにする。第三部では、『寓話』の特徴を題材および文体の面から論じる。そのうえで、最後に主要人物論を提示し、『寓話』全体を貫く「反復の原理」を指摘するとともに、フォークナーが『寓話』において成し遂げた「力業」(tour de force)の内容を明らかにする。

## 第一部 フォークナーと『寓話』

第一部は以下の三章によって構成される。

### 第一章 『寓話』への道

### 第二章 復活の歌

### 第三章 名声の影で

第一章では、『寓話』のきっかけとなるアイディアを得るまでのフォークナーについて、特に戦争との関連、および1940年代の経済的苦境に焦点を当てて説明する。

フォークナーが『寓話』のきっかけとなるアイディアを得たのは、1943年8月、ハリウッドでのことであった。当時フォークナーはワーナー・ブラザーズとの長期契約に縛られ、ハリウッドで不本意な日々を過ごしていた。彼をそこまで追い込んだのは、経済的苦境であったが、それはまた芸術家としての忘却という危機も意味していた。さらに第二次大戦は戦争に関わる彼のトラウマを刺激し、フォークナー

は戦争への憧れと批判との間に引き裂かれてしまう。戦争への複雑な思いと経済的苦境、さらに芸術家としての危機から生じた自己懷疑は、フォークナーを深く動揺させ、彼は人生最大の危機を迎えていたのである。

第二章は、種子となるアイデアを得た後、出版社や友人たちからの支援の下、粘り強く創作を続けたフォークナーの姿および『寓話』の発展過程を跡づけている。また、なぜフォークナーがこのアイデアに執着したか、フォークナーの芸術観を手がかりに解き明かす。すなわち、フォークナーは自らを無名兵士＝キリストと重ねることで、芸術家としての復活をはかっていたのである。

第三章では、5年近い中断の後、ついに『寓話』の完成にまでこぎ着けるフォークナーの姿を描く。この間、フォークナーはノーベル文学賞を受賞し、ついに名声と経済的安定を手に入れる。反面、彼の私生活は次第に混迷の度を深め、『寓話』出版の頃、その家庭は崩壊直前の状態に陥っていた。このような過程を経て創作された『寓話』は、フォークナーの生涯で最も困難かつ多事だった10年を象徴するものとなったのである。

## 第二部 『寓話』論概説

第二部は以下の二章から成る。

### 第一章 フォークナーによる発言

#### 第二章 批評概観

第一章では、『寓話』完成後のフォークナーによるコメントを概観し、その特徴を指摘する。なかでも注目に値するのは、フォークナーが示す「反復への強迫観念」である。すなわち、もしキリストが第一次大戦の最中に現れ、十字架に架けられたとすれば、それはかつての受難の反復である。一方、第二次大戦は第一次大戦の反復であり、だとすれば、もしキリストが第一次大戦に姿を現していたならば第二次世界戦においても現れるはずである。それは救済への可能性の反復であるが、にもかかわらず人類はまたしてもキリストを殺してしまい、救済のチャンスを逸してし

まうかもしれない。フォークナーはこのような反復の感覚にとりつかれており、それこそ彼を希望と絶望との間に引き裂いていたものなのである。

続く第二章は、これまでの『寓話』批評の概観である。これまでの『寓話』に関する批評の主な論点は、(1)聖書との関連、(2)文体、(3)人間観・戦争観(4)登場人物論の四点であった。

(1) 聖書との関連は、初期批評においては非難的であったが、1970年に発表された二つの論文が、『寓話』におけるキリストの意義について、ほぼ結論を出してしまった。ブラムは『寓話』をアメリカ文学の伝統の中に位置づけ、この小説におけるキリストの描き方が「無垢の受難者」という「タイプ」と一致することを指摘している。一方、フィケンは『寓話』に登場するキリスト的人物が伍長だけではないと主張し、この小説に描かれるキリストとは他人のために苦しみ死ぬことができる人間の可能性の象徴だとしている。フィケンの主張はこの小説を硬直した寓意的解釈から解放するものであり、また、その構成について重要な示唆を与えてくれるものである。

(2) 文体もまた、出版当初から非難的であったが、ヘニッヒハウゼンが従来の議論を一変させてしまった。すなわち、ヘニッヒハウゼンによれば、『寓話』の哲学的あるいは抽象的な部分は、「詩としての小説」となっており、象徴的メタファーと抽象的思考が一体化した新しい媒体が用いられているのである。また、タブローあるいはパノラマとなっている部分は、小説・哲学的エッセイ・散文詩の中間にある独創的な文体となっている。ヘニッヒハウゼンの指摘は、この小説を読む独特の喜びというものの本質を的確に示している。

(3) 戦争観・人間観については、グレッセとカーティゲイナーによる議論が注目に値する。グレッセはフォークナーが早くから戦争と機械に魅力を感じると同時に恐れを抱いていたとし、そのような態度から機械による破滅という戦争のイメージが生まれてきたと主張する。一方、カーティゲイナーはフォークナーの戦争観を南部伝統文化の文脈でとらえ、そこからフォークナー独自のモダニズムの特徴へと議論を展開している。その際、カーティゲイナーは「身振り」の重要性を指摘する

が、それはそのまま優れた『寓話』論となっている。

(4) 人物論は、これまでの『寓話』批評の中心であった。それらは元帥と伍長の対立への解釈において、三つに類型化できる。すなわち、伍長の道徳的勝利と見なす立場、元帥の体現する制度の意義を強調する立場、二人の対立自体が人類の普遍的あり方の表現になっているとする立場である。これらは『寓話』を寓話的に解釈するものであり、その意味で重大な限界があるといえよう。

一方、人物たちの多義性を指摘する論者たちも、少数ながら存在した。それらは『寓話』を小説として読む態度につながるものであり、今後の『寓話』批評の目指すべき方向性を示している。

なお、人物論に関し特筆すべき点は、女性的なものの重要性を指摘したものが1985年のポークによる論考まで存在しなかったことである。この事実は、『寓話』批評がいかに類型的な議論に偏っていたか、端的に表している。

以上の概括を踏まえ、これまでの『寓話』批評に欠けていた点を考えてみると、まず目立つのは第一次大戦と結びつけた議論が全くなかったことである。それと関連し、この小説における「アメリカ」の意義についても十分な議論は行われていない。また、この小説のテキストの関する研究も不十分であるが、これは他の作品も含めたフォークナー研究一般の傾向であるように思われる。さらに、『寓話』に関しては、他の作品では盛んに行われている理論的アプローチもほとんど行われていない。

### 第三部 『寓話』考

第二部における議論を踏まえ、第三部では次の三章に分けて議論が行われる。

#### 第一章 第一次大戦小説としての『寓話』

#### 第二章 『寓話』の文体

#### 第三章 『寓話』における反復の原理

第一章では、第一次大戦の歴史的特徴が確認され、『寓話』がかなり史実を意識

して書かれていることが明らかにされる。ここで検討される第一次大戦の特徴とは、(1) 世界中を巻き込んだ戦争だったこと、(2) 機械が人類滅亡の可能性を予見させたこと、(3) アメリカが決定的な役割を果たしたこと、(4) 反乱が頻発したこと、(5) 戦死者の聖化が行われ、戦争の正当化が試みられたこと、の5点であり、それぞれにつき『寓話』がどのようにその問題を描いているかが検討される。

(1) 世界大戦としての第一次大戦を、『寓話』はセネガル兵の描写によって鮮やかに描いている。作中、セネガル兵は一貫して演劇と結びつくイメージで描かれており、それは祖国を奪われた末に戦争に駆り出された植民地兵のあり方を巧みに表している。また、彼らは道化、あるいは根こそぎ流されてきた樹木にもたとえられているが、それらもまた植民地兵のあり方を鮮やかに反映したものである。

(2) 機械への批判は、『寓話』に繰り返し登場するが、その最たる表現は元帥による長広舌である。「最後の誘惑」の場で元帥は伍長に対し、機械に駆逐されていく人間の将来を延々と語り続けるが、そこには奇妙な昂揚感が感じられる。それは元帥の機械批判が「人間の愚かさへの頌歌」とも言うべき屈折した人間批判となっているからであり、しかもそれがそのまま人間への信頼の表明となっているからである。このように、機械についての議論は人間論と不可分であり、しかもその批判は、人間への屈折した信頼の表明へとつながっている。

(3) これまでまったく指摘されたことがないが、『寓話』においてアメリカは決定的に重要な役割を果たしている。その端的な表れは、伍長の実現した休戦を打ち破り、かつ伍長の遺体が無名兵士の墓へ葬られるきっかけを作るのが、アメリカ軍による砲撃だとされている点である。しかも、その砲撃はアメリカ軍が初めて主体的に実施した作戦開始時のものであった。すなわち、『寓話』はアメリカが世界史上の表舞台に躍り出た一瞬を捉え、それを象徴的なキリスト殺しと結びつけていることになる。ここには、第一次大戦から現代に至るまでアメリカが果たしてきた役割への、先回りの批判があるといえよう。

(4) 第一次大戦は、実は反乱が頻発した戦争であった。有名なロシア兵の反乱の他、1917年には大規模な命令拒否がフランス兵の間で発生している。また、開戦

一年目のクリスマスには、敵味方を超えた友好的交わりが自然発生的に各地で見られた。このように、反乱あるいは自発的な戦闘拒否は、第一次大戦の大きな特徴であった。すなわち、一伍長に率いられた一連隊の突撃命令拒否を題材とする『寓話』は、この戦争の歴史的に重要な特徴を把握した小説なのである。

(5) 第一次大戦後に見られた戦死者の聖化への代表的な試みが、「無名兵士の墓」であった。この試みはナショナリズムの端的な表れであり、「国家」が象徴的行為により自らの行為の問題性を隠蔽しようとする典型的な例である。フォークナーはテオドールの母のエピソードにおいて、この制度に関わる「国家」の試みの欺瞞性を鮮やかに暴いている。このエピソードは「実の母」と「母なる国」の綱引きと解釈でき、テオドールの母の悲しみと強さは、「国家」の欺瞞性をさらけ出している。だが、このエピソードの意味するものは、それだけにとどまらず、フォークナーはここで「実の母」対「母なる国」という二項対立までも解体してしまっている。このような箇所において、『寓話』は寓話ではなく、まさに小説となっているのである。

第二章では、まず『寓話』の大きな特徴であるセットピースの分析が行われ、ヘニツヒハウゼンの主張が確認されると同時に、細部における曖昧性が指摘される。このような曖昧性は、ヘニツヒハウゼンの言う『寓話』の深層構造を示すものであり、別の言い方をすれば、『寓話』を小説にしているものなのである。

次いで、『寓話』に頻出する「自ら動きを止める」再帰的なイメージが取り上げられ、『寓話』の人間観・戦争観との関連で検討される。フォークナーにとって、戦争とは人間存在の比喩そのものであると同時に、人間の営みの代表的なものである。すなわち、戦争と人間は一体化されているのであり、『寓話』に頻出する再帰的イメージはその反映である。

文体に関する議論の最後に、西洋古典への言及やカタログ的文体、さらに古語の使用が指摘される。それらはまず「一文の中に歴史全体を取り込もうとした」フォークナーの野心の表れである。また特に大げさな西洋古典への言及、あるいはカタログ的文体からは、多様なアイロニーが生み出されており、それらのアイロニーは『寓

話』を単純な寓話の枠を超えた小説としている。

第三章では、『寓話』の主要人物を「女性的なるもの」との関連から分析し、各人物がいわば同じ問題に対する異なる対応を描いていることを明らかにする。

まずグラニヨン・レヴィン・歩哨は、それぞれ「女性的なるもの」から逃れようとした末に、袋小路に陥った人物である。だが、3人はまた人間的に生まれ変わる可能性を示しており、その意味で「復活」の可能性の表現となっている。『寓話』におけるキリスト的可能性とは、人間のこのような「復活」の可能性のことなのである。

元帥もまた「女性的なるもの」から逃れ続けた人物である。だが彼は人間的復活の可能性とは無縁であり、それゆえ最終的に擬似的な存在である「母国」の体現者となるのである。

一方、伍長は「女性的なるもの」と実りある関係を結ぶ唯一の人物である。この点においては、彼は元帥とまさに対極的な存在であり、だからこそ元帥を批判することができたのである。

連絡兵は、「女性的なるもの」と一定の付き合いのできる人物であり、女性たちの導きによって試練を乗り越え、最終的に「生きる傷跡」として元帥の国葬を混乱に陥れる。この連絡兵の姿こそは、フォークナーが理想とした芸術のあり方そのものであり、このとき、連絡兵はフォークナー的芸術の体現者となったのである。

このように、フォークナーは『寓話』において、「女性的なるもの」と男たちの様々な関係を描き、「男たちの世界」へと逃れた者たちの不毛を描くと同時に、秘められた復活の可能性を指摘した。彼はまた、連絡兵の成長を描くことにより、戦争への根本的な批判を行うとともに、自らを不滅の芸術の創造者としてしまった。それは人類永続への希望であると同時に、芸術家として自らの名を永遠のものとするということでもあったのである。これぞフォークナーが『寓話』で行った力業であった。

氏名	かな ざわ 金 澤	さとし 哲
----	--------------	----------

(論文審査の結果の要旨)

ウィリアム・フォークナーが十年以上の歳月をかけて完成した大作『寓話』は、1954年に出版されたその当時から、失敗作として冷遇されてきた。その理由として挙げられる点はいくつかある。まず、この作品がフォークナー評価で最も中心的な位置を占めるいわゆる「ヨクナパトーフア」物の系列から外れるものであること。そして、第一次大戦中のフランスを舞台にして、戦争の継続に反旗を翻した兵士たちを描きながら、そこにキリストの受難の物語を重ね合わせるという破天荒な構図を持っていること。さらに、後期フォークナーの特徴である、晦渋な文体で抽象的な議論が延々と展開されること。こうした原因から下された失敗作という評価は、フォークナーが単にアメリカを代表する南部作家と言うだけではなく、20世紀文学に屹立する作家として世界的な地位を確立した今日に至っても、完全に払拭されたとは言い難い。金澤哲氏の『フォークナーの「寓話」—無名戦士の遺したもの』は、こういった状況を一気に覆し、フォークナー自身が「最高傑作」と呼んだ『寓話』のしかるべき再評価を目指すとともに、今後の『寓話』研究の土台を築き上げようとした、まことに気宇壮大な試みであり、フォークナーが『寓話』の創作に投入したエネルギーに匹敵するような努力を費やして書かれた力作である。

第一部「フォークナーと『寓話』」では、フォークナーがこの作品のきっかけとなる着想を得た時点から完成に至るまでの苦労が、執筆当時の彼の経済的苦境も含めて、克明にたどられる。ここで金澤氏は、フォークナーの書簡などの資料をふんだんに活用しつつ、手堅く粘り強い記述を一貫して続けている。

第二部『『寓話』論概観』では、フォークナー自身の『寓話』に対する発言をまとめるとともに、これまでの『寓話』批評を網羅的かつ分類的に総括している。特に後者は、個々の『寓話』批評を要領よく紹介し評価しながら、過去の『寓話』批評に欠けていた観点や、今後の『寓話』再評価にあたってさらに研究を深める必要がある問題を指摘している点において、これから『寓話』に挑戦する研究者たちに



とって資するところの大きい見取り図を提供していると言える。

そして第三部「『寓話』考」は、第二部での『寓話』批評概観を受けた、金澤氏による『寓話』論の実践である。最初に置かれている論考は、第一次大戦小説として『寓話』を読み解こうとする試みである。ここで金澤氏は、抽象性や寓話性のみが問題にされる傾向が強かった従来の『寓話』批評に対抗して、歴史的資料に基づきながら、第一次大戦がはらんでいた諸問題をいかに『寓話』が掬い取っているか、すなわち『寓話』がどれほどアクチュアリティに満ちた小説であるかを、説得力を持って論じている。次に置かれているのは、第二部で紹介されたヘニツヒハウゼンによる文体論的研究の方向性を継承した論考である。ここでは、『寓話』を寓話として読むのではなく、フォークナーの晦渋な文章を精緻に読みほぐしつつ、多義性をはらんだ象徴的イメジャリに注目することで、『寓話』をあくまでも小説として読もうとする姿勢が強調されている。最後に置かれているのは、『寓話』を「女性的なるもの」との関連からとらえ、それを登場人物ごとに考察したセクションで、これは最近のフォークナー研究の動向をふまえたものであると同時に、本書を締めくくる役割も担っている。

総じて、本論文には細部の読みにおいて従来にはなかった新しい指摘や解釈が多く含まれ、論者がこの難解な『寓話』を徹底的に読み込んだことが十分に納得される内容になっている。ただ、第一部と第二部に比較して、独自の読みを提示する第三部が量的に少ないという構成上の欠陥は認められるが、これは出版上の制約によるものであり、論者はさらに今後書き続けられる『寓話』論だけを独立して出版する計画を持っていると聞くので、それが完成する日を待ちたい。いずれにせよ、本論文は金澤氏が意図したとおり、これからの『寓話』研究者が必ず参照すべき書物として十分な資格を備えた道標的著作に仕上がっており、その労を多としたい。

以上、審査したところにより、本論文は博士(文学)の学位論文として価値あるものと認められる。平成二十年十一月二十八日、調査委員三名が論文内容とそれに関連した事柄について口頭試問を行った結果、合格と認めた。